

令和2年度決算

# 茨木市 財務書類

---



# 目 次

I	新しい地方公会計制度について	1
II	新しい地方公会計制度における財務書類	2
III	対象となる会計の範囲	3
IV	財務書類4表	4
	貸借対照表(BS)	4
	行政コスト計算書(PL)	6
	純資産変動計算書(NW)	8
	資金収支計算書(CF)	10
V	財務書類から見てくる茨木市の状況	12
VI	一般会計等 財務書類	15
VII	全体会計 財務書類	20
VIII	連結会計 財務書類	25

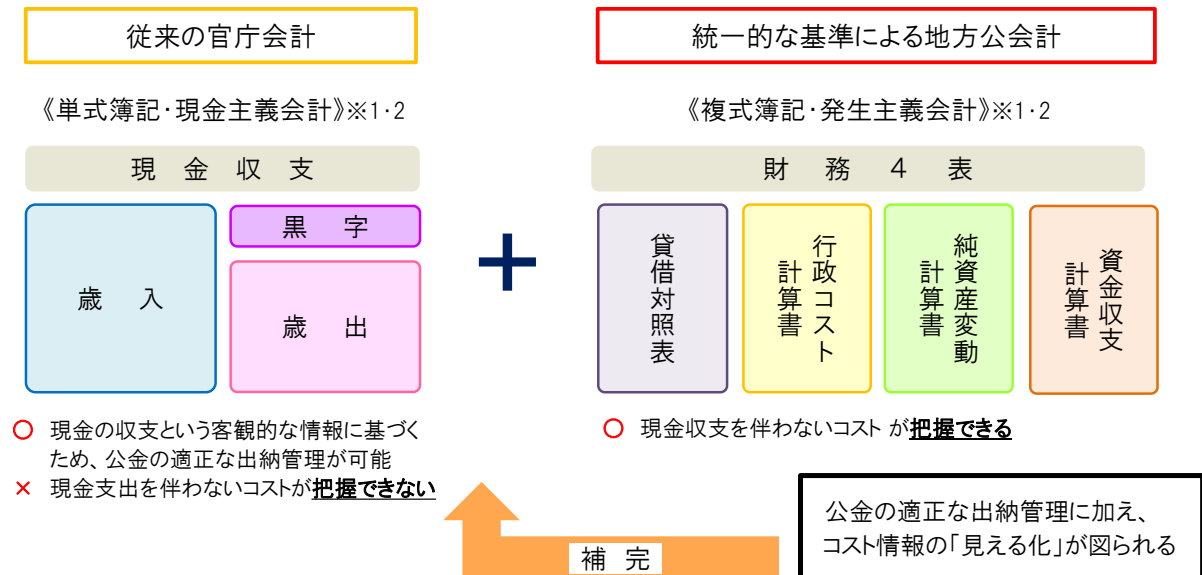
# I 新しい地方公会計制度について

## 統一的な基準による「公会計」の整備とは

財政情報の透明性を確保し、財政運営の効率化・適正化を図るため、平成14年度決算から「旧総務省方式(2表)」を、平成20年度決算からは「総務省方式改訂モデル(4表)」による財務書類を作成してきました。

こうした中で、総務省は平成27年1月に、より一層の財政マネジメントの強化や、団体間の比較可能性を高めることを目的として、「統一的な基準による地方公会計マニュアル」を公表し、同マニュアルに基づく財務書類の作成について、総務大臣から通知がありました。

この通知を受け本市では、補助簿となる固定資産台帳を整備するとともに、統一的な基準による発生主義や複式簿記の財務書類(4表)を作成しました。



### 《固定資産台帳の整備》

固定資産台帳とは、その取得から除売却処分に至るまで、その経緯を個々の資産ごとに管理するための帳簿で、所有する全ての固定資産(道路、公園、学校、公民館等)について、取得価額、耐用年数等のデータを網羅的に記載したものです。

固定資産台帳の整備は、「統一的な基準」により財務4表の作成にあたって前提とされており、貸借対照表は固定資産を適切に把握・分類した固定資産台帳に基づいて作成しています。

なお、固定資産台帳の情報については、効率的な公共施設等のマネジメントや保有財産(市が所有する不動産など)の有効利用等へ活用していきます。

※ 減価償却…使用に伴う資産の消耗・老朽化に合わせて、会計処理上、資産の価値を耐用年数(固定資産が使用できる期間として法に定められた年数)に応じて減少させていくことを減価償却といいます。この減少をコストとして計上したものを減価償却費と言い、貸借対照表と行政コスト計算書において科目として計上されます。

- ※1-1 単式簿記 主に財産の変動(増減)のみを記録する簿記。家計簿もこれに含まれます。
- ※2-1 複式簿記 ひとつの取引について、資産(例えば建築した施設)の増加と資産(建築にかかった経費)の減少という取引の二面性に着眼して記録する簿記。
- ※1-2 現金主義会計 収益と費用を現金の受け渡しの時点で認識する会計原則。
- ※2-2 発生主義会計 現金の受け渡し時点にかかわらず、取引の確定時点で収益又は費用を計上する会計原則。

## Ⅱ 新しい地方公会計制度における財務書類

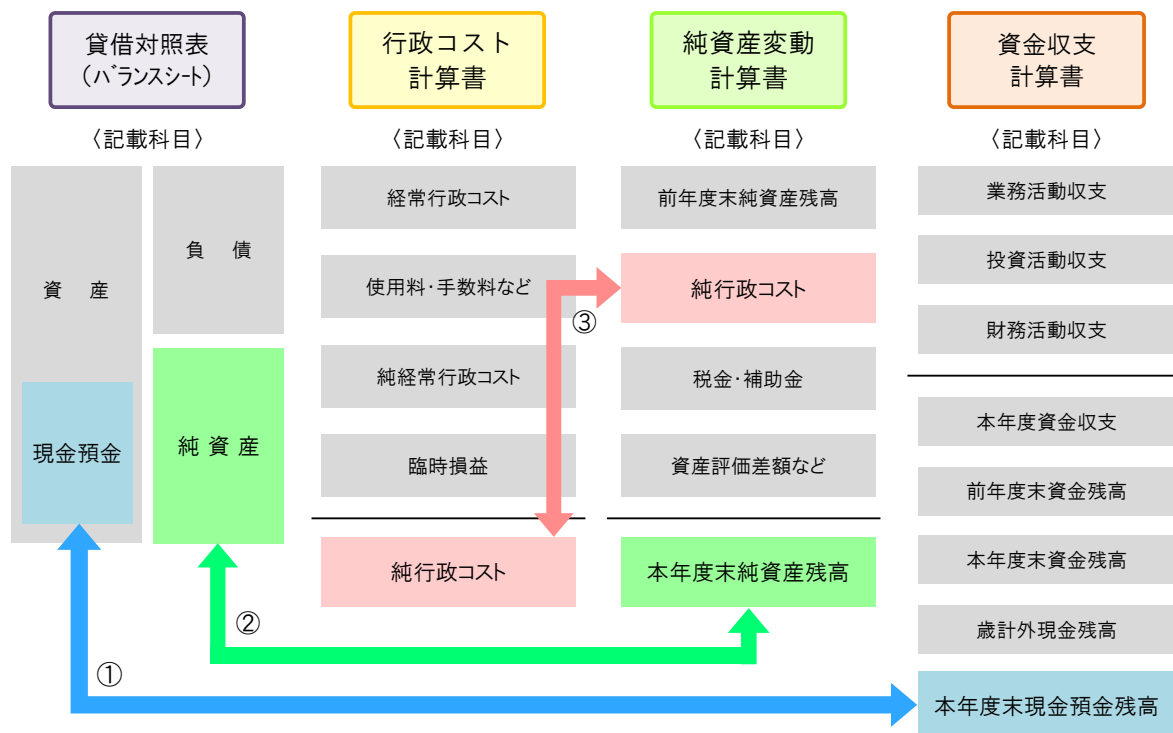
### 財務書類(財務4表)とは

財務書類(財務4表)とは、企業会計に用いられる発生主義・複式簿記の考え方に基づいて作成される資料で、公会計では「貸借対照表」「行政コスト計算書」等の4つの表を作成することとされています。  
財務書類の作成により、資産や負債などのストック情報や、現金主義では見えにくいコスト情報等の把握が可能となります。



### 財務4表の相関関係図

財務4表は、各表はそれぞれが独立しているものではなく、表間で金額が連動している部分があり、有機的に結びついたものとなっています。なお、4表の結びつきを示した相関関係は下の図のとおりです。



### Ⅲ 対象となる会計等の範囲

統一的な基準による財務書類は、下図のとおり、①「一般会計等」と、これに特別会計（地方公営事業会計）や公営企業会計を含めた②「全体会計」、さらに本市と連携している関連団体（一部事務組合及び広域連合、第3セクター）の会計を加えた③「連結会計」の3つの区分で作成されます。

区	分	対象となる会計等
③連結会計	①一般会計等 <small>(※1)</small>	一般会計
		国民健康保険事業特別会計
		介護保険事業特別会計
	②全体会計	地方公営事業会計
		後期高齢者医療事業特別会計
		水道事業会計
	③連結会計	公営企業会計
		下水道等事業会計
		一部事務組合 広域連合
		淀川右岸水防事務組合
		大阪府後期高齢者医療広域連合
		大阪広域水道企業団（水道事業会計）
		大阪広域水道企業団（工業用水道事業会計）
		大阪府都市競艇企業団 <small>(※2)</small>
		茨木市土地開発公社
茨木市保健医療センター		
茨木市文化振興財団		
茨木市観光協会		
第3セクター		
FICベース株式会社 <small>(※3)</small>		

※1: 一般会計及び地方公営事業会計以外の特別会計

※2: 平成28年度から企業会計に移行したため、新たに連結を実施

※3: 令和元年度に設立されたため、新たに連結を実施

## IV 財務書類4表

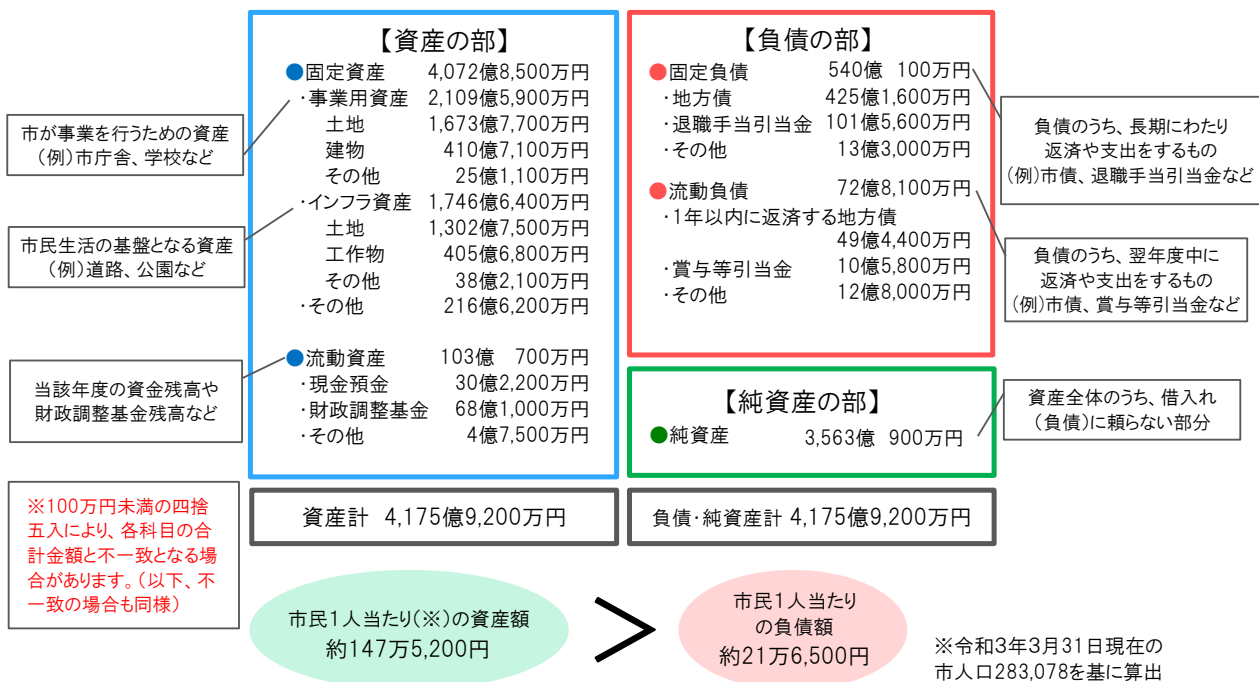
### 貸借対照表(BS)

貸借対照表は、会計年度末時点で、どのような資産を保有しているのか(資産保有状況)と、その資産がどのような財源でまかなわれているのか(財源調達状況)を対照表で示したもので、本市における資産・負債・純資産といったストック項目の残高が明らかとなります。資産が地方債等による将来世代の負担によって形成されたのか、基金及び税収等の過去又は現世代の負担によって形成されたのかが明らかとなります。

令和3年3月31日現在の茨木市の**資産**総額は4,175億9,200万円です。

資産調達の財源は、将来返済する地方債(市の借金)などの**負債**が612億8,300万円、これまでの世代が負担した**純資産**が3,563億900万円となっています。

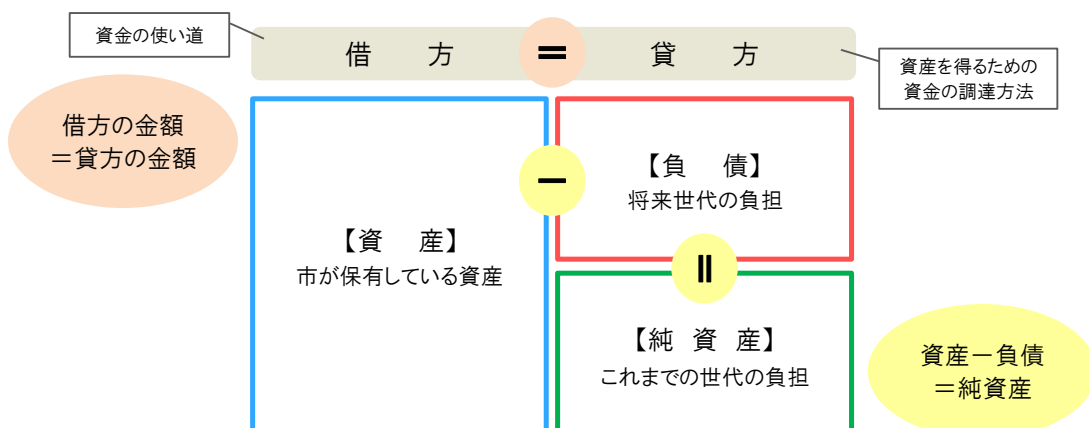
なお、市民1人当たりの金額に換算すると、**資産**は約147万5,200円、**負債**は約21万6,500円となります。



#### 〈貸借対照表の見方〉

次ページのとおり、表は左右に分かれており、左側は**資産**を表し「借方」、右側は**負債**と**純資産**を表し「貸方」と言います。借方と貸方の金額は一致することから、貸借対照表は別名「バランスシート」と呼ばれています。

**負債**が**資産**を上回り、「**資産** - **負債**」で求められる「**純資産**」がマイナスになると、いわゆる「債務超過」となり健全でない財政状況であることを意味します。本市では、**資産**が**負債**を大きく上回っていることから、貸借対照表上、健全な財政状況であることが分かります。



# ■ 貸借対照表の概要

資産		負債	
固定資産	A	固定負債	C
有形固定資産		地方債	
事業用資産		長期未払金	
インフラ資産		退職手当引当金	
物品		損失補償等引当金	
無形固定資産		その他	
ソフトウェア		流動負債	D
その他		1年内償還予定地方債	
投資その他の資産		未払金	
投資及び出資金		賞与等引当金	
長期延滞債権		預り金	
長期貸付金		その他	
基金		負債合計	E=C+D
その他		純資産	
徴収不能引当金		固定資産等形成分	
流動資産	B	余剰分(不足分)	
現金預金			
未収金			
短期貸付金			
基金			
財政調整基金			
徴収不能引当金		純資産合計	F
資産合計	A+B	負債及び純資産合計	E+F

行政サービスを提供するための公共施設等の固定資産や将来、行政サービスに使用する現金等の資産

庁舎、市営住宅、学校、市民利用施設、土地など  
道路、橋りょう、河川、公園など

公営企業・関連団体への出資金、有価証券など  
市税等の収入未済額のうち1年以上経過したもの

現金及び1年以内に換金可能な資産

市税等の収入未済額のうち1年以内に発生したもの

市税等の収入未済額のうち回収不能見込額

地方債など、将来世代の負担

返済期日が1年を超える債務など

契約などにより後年度の支払いが確定している、翌々年度以降の支払額など

将来発生する退職手当見込額

財務書類作成上の第三セクター等に対する損失補償等の負担見込額

契約などにより後年度の支払いが確定している翌年度の支払額など

翌年度に支払うことが予定されている賞与のうち当該年度負担額

所得税、社会保険料など

(減価償却累計額の控除後の)固定資産等の残高

流動資産(短期貸付金と基金は除く)から負債を控除したもの

過去又は現世代の負担  
・固定資産形成分  
…資産形成のために  
  充当した資源の蓄積  
・余剰分(不足分)  
…消費可能な資源の蓄積(例:現金預金)

## 行政コスト計算書(PL)

行政コスト計算書は、一会計期間において、資産形成に結びつかない経常的な行政活動に係る費用(経常的な費用)と、その行政活動と直接の対価性のある使用料・手数料などの収益(経常的な収益)を対比させたものです。

「純経常行政コスト」は、地方公共団体の活動のために経常的に発生する人件費、物件費、移転費用(補助金等)などの費用から、使用料、手数料等の受益者負担収益を差し引くことで求められます。

「純行政コスト」は、「純経常行政コスト」に臨時に発生する損失、利益を加味したものです。

行政サービスを1年間提供するのにかかった「経常費用」は1,185億1,200万円で、使用料や手数料などの利用者負担額等を差し引いた「純経常行政コスト」は1,146億7,600万円となっています。また、災害復旧事業費などの臨時的なコストと収入を加味した「純行政コスト」は1,147億1,800万円です。

経常費用… ①	1,185億1,200万円
(内訳)	
人にかかるコスト (職員の給料や退職手当引当金など)	177億8,000万円
物にかかるコスト (消耗品や委託料、建物の維持管理や減価償却費など)	247億5,300万円
社会保障費等のコスト(移転費用) (障害福祉サービスや生活保護、医療費助成等の社会保障給付、各種団体に対する補助金、他会計への繰出金など)	748億1,900万円
その他の業務にかかるコスト (支払利息など)	11億6,000万円

経常費用については、「業務費用」となる人にかかるコストや物にかかるコストのほか、「移転費用」に分類される「社会保障費等のコスト」が最も多額であることが分かります。その内訳としては、障害福祉サービスや生活保護をはじめとする扶助費が高い割合を占めています。

### 《コスト情報の「見える化」》

経常行政コストの中には、官庁会計では見えにくいコストとして、「人にかかるコスト」の退職手当に係る「引当金(※)」や、「物にかかるコスト」の「減価償却費」が計上されています。

これらは、実際の現金収支を伴わないコストに関する情報であり、このことにより、コスト情報に関する「見える化」が図られています。

経常収益… ②	38億3,600万円
使用料・手数料などの利用者負担、諸収入等	38億3,600万円

純経常行政コスト(①-②)… A	1,146億7,600万円
------------------	---------------

市民1人当たり(※)  
約40万5,100円

※令和3年3月31日現在の市人口283,078人を基に算出

臨時損益… B	4,100万円
資産の除却等	4,100万円

純行政コスト(A+B)	1,147億1,800万円
-------------	---------------

市民1人当たり  
約40万5,300円

※ 引当金 当期以前の事象が原因で、将来に特定の費用や損失が発生する確率が高く、その発生額を合理的に見積もることができる場合、その支出に対して準備される費用のこと。一般的に、将来支給が見込まれる退職手当や、翌年度の支給が見込まれる賞与にかかる引当金などがあります。



■ 行政コスト計算書の概要

<b>経常費用</b> A		人件費、物件費、移転費用(補助金など)を発生額で計上
<b>業務費用</b>		
人件費		
職員給与費		翌年度6月に支給する賞与のうち、当該年度分(12月から翌年3月までの4ヶ月分)を計上
賞与等引当金繰入額		
退職手当引当金繰入額		当該年度に繰り入れた退職手当引当金見込額
その他		
<b>物件費等</b>		
物件費		消耗品費、光熱水費、印刷製本費、業務委託費、使用料及び賃借料、備品購入などの経費
維持補修費		資産形成につながらない公共施設等の維持修繕経費
減価償却費		固定資産について、使用期間中、毎年度資産的価値が減少するとみなし、費用計上するもの
その他		
その他の業務費用		
支払利息		
徴収不能引当金繰入額		
その他		
移転費用		市民や特別会計など他団体・他会計に移転する経費
補助金等		事業実施に係る補助金、助成金、負担金
社会保障給付		医療、子育て、障害、生活保護などの扶助費
他会計への繰出金		国保会計繰出金、下水道等事業会計繰出金など
その他		
<b>経常収益</b> B		
使用料及び手数料		経常的に発生する費用から、使用料及び手数料といった受益者負担収益を差し引くことで純経常行政コストを算定
その他		
<b>純経常行政コスト</b>		
臨時損失(C)		災害復旧費、資産除売却損などの臨時に発生した経費
臨時利益(D)		資産の売却による収入が帳簿価額を上回る場合の差額
資産売却益		臨時に発生する損失、利益を加味して純行政コスト(税を主とする一般財源等で賄うべきコスト)を算定
その他		
<b>純行政コスト</b> A-B+C-D		

## 純資産変動計算書(NW)

純資産変動計算書は、貸借対照表の純資産の部に計上されている各項目が、1年間でどのように変動したかを表すものです。

1年間の純行政コストの金額に対して、税金等及び国県等補助金の金額がどの程度あるかを比較することにより、行政サービスの提供に必要となるコストが、受益者負担以外の財源によってどの程度賄われているのかを把握することが可能となります。

令和2年度の純行政コスト1,147億1,800万円に対して、財源(税金等、国府補助金)は1,172億2,900万円であるため、「本年度差額」は25億1,100万円となります。

このほか、固定資産等の無償所管換等によるマイナス分を加えた「本年度純資産変動額」が65億6,200万円となったことにより、令和2年度の純資産残高は3,563億900万円となりました。

前年度末純資産残高 … A	3,497億4,700万円	
純行政コスト(△) … ①	△1,147億1,800万円	「行政コスト計算書」の 純行政コストと一致
財源 … ②	1,172億2,900万円	
税金等	573億6,300万円	
国府補助金	598億6,600万円	
本年度差額(①+②) … B	25億1,100万円	
本年度純資産変動額 … C	65億6,200万円	
本年度末純資産残高(A+C)	3,563億 900万円	「貸借対照表」の 純資産額と一致

### 〈純資産変動計算書の見方〉

純行政コストの金額と税金等及び国県等補助金の金額の差額は、財政的な収支均衡が図られているかどうかを表しています。

コストと収益の差額は、民間企業においては損益や利益という形で示されることが想定されますが、それとは意味が異なります。

本年度差額がプラスの場合は、現世代の負担によって将来世代も利用可能な資源を貯蓄したことを意味する一方、マイナスの場合は、将来世代が利用可能な資源を現世代が消費してサービスを受けているということの意味しています。

なお、環境衛生センターの整備や、彩都はなだ公園の移管による有形固定資産の増加などにより、本年度末純資産残高は3,563億900万円となりました。

## ■純資産変動計算書の概要

前年度末純資産残高	A	
純行政コスト(△)		行政コスト計算書の「純行政コスト」と連動
財源		
税金等		市税、地方交付税、地方譲与税・交付金など
国県等補助金		国・府支出金
<b>本年度差額</b>	<b>B</b>	
固定資産等の変動(内部変動)		
有形固定資産等の増加		<p>純行政コストの金額に対して、税金等及び国の補助金等受入の金額がどの程度あるかを見ることにより、受益者負担以外の財源によりどの程度賄われているかを把握</p>
有形固定資産等の減少		
貸付金・基金等の増加		
貸付金・基金等の減少	C	
資産評価差額		
無償所管換等		無償で譲渡または取得した固定資産価額、その他年度途中に判明した固定資産価額など
その他		
<b>本年度純資産変動額</b>	<b>D=B+C</b>	
<b>本年度末純資産残高</b>	<b>A+D</b>	貸借対照表の「純資産」と連動

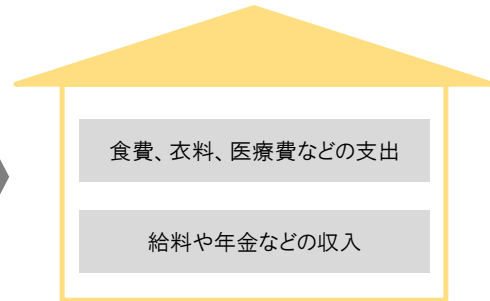
# 資金収支計算書

資金収支計算書は、行政活動に伴う資金収支を、毎年度継続的に実施される行政サービスの「業務活動」と資産形成等につながる投資的事業を行う「投資活動」、地方債の借入れや返済の償還に係る「財務活動」に区分して表しています。

基礎的財政収支(プライマリーバランス)等の指標により、借金に頼った財政運営を行っているかが表されます。

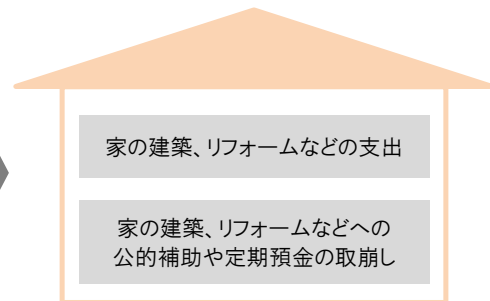
業務活動		行政サービスを行う中で毎年度継続的に収入・支出されるもの
支 出	人件費	174億9,200万円
	物件費	193億 500万円
	社会保障費	287億6,000万円
	その他(補助金、繰出金等)	469億 700万円
収 入	市税など	572億6,200万円
	国や大阪府からの補助金	568億6,900万円
	その他	33億2,300万円
《業務活動の収支》… ①		49億9,000万円

家計に例えてみると…



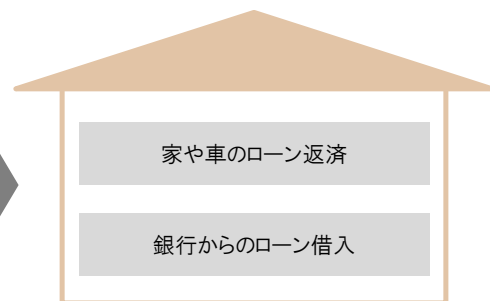
投資活動		公共施設などの整備や投資・貸付金などの収入・支出
支 出	道路や公共施設等の整備費	61億1,200万円
	基金への積立て	14億7,900万円
	その他	6億2,900万円
収 入	国や大阪府からの補助金	29億9,700万円
	基金の取崩し	14億2,300万円
	貸付金の元金回収	6億1,800万円
	その他	5億8,400万円
《投資活動の収支》… ②		△25億9,800万円

家計に例えてみると…



財務活動		地方債などの外部からの借入れや、その返済などの収入・支出
支 出	地方債の返済	48億7,900万円
	その他	700万円
収 入	地方債の発行	23億3,600万円
《財務活動の収支》… ③		△25億5,000万円

家計に例えてみると…



本年度資金収支額 (①+②+③) … A △1億5,800万円

前年度末資金残高 … B 20億 300万円

本年度末資金残高 (A+B) 18億4,500万円

本年度末資金残高 18億4,500万円
 +
 本年度末歳計外現金残高 11億7,700万円
 =
 本年度末資金預金残高 30億2,200万円

貸借対照表の「現金預金」と一致

## ■資金収支計算書の概要

<b>業務活動収支</b>	通常の業務活動に係る収支
業務支出	
業務費用支出	人件費、物件費等、市債の支払利息など
移転費用支出	事業実施等に係る補助金・助成金・負担金、福祉・医療・子育て・障害・生活保護などの扶助費、他会計への繰出金
業務収入	
税金等収入	
国県等補助金収入	投資活動収入以外の国・府支出金
使用料及び手数料収入	
その他の収入	
臨時支出	
臨時収入	
業務活動収支 A	
<b>投資活動収支</b>	建物等の建設や用地取得、その他資産形成につながる支出、基金への積立て・取崩しなどに伴う資金の収支
投資活動支出	
公共施設等整備費支出	
基金積立金支出	
投資及び出資金支出	
貸付金支出	
その他の支出	
投資活動収入	
国県等補助金収入	公共施設等の整備に係る国・府支出金
基金取崩収入	
貸付金元金回収収入	
資産売却収入	
その他の収入	
投資活動収支 B	
<b>財務活動収支</b>	市債発行額や元金償還金等に係る資金の収支
財務活動支出	
地方債償還支出	
その他の支出	
財務活動収入	
地方債発行収入	
その他の収入	
財務活動収支 C	
<b>本年度資金収支額 D=A+B+C</b>	
前年度末資金残高 E	形式収支(歳入決算額－歳出決算額)
<b>本年度末資金残高 F=D+E</b>	
前年度末歳計外現金残高	
本年度歳計外現金増減額	
本年度末歳計外現金残高 G	
<b>本年度末現金預金残高 F+G</b>	貸借対照表の流動資産中「現金預金」と連動

## V 財務書類から見えてくる茨木市の状況(令和2年度決算)

統一的な基準による地方公会計の整備により、従来の決算統計や地方公共団体の財政の健全化に関する法律における健全化指標等、既存の指標に加え、資産・負債に関する新たな指標を算出することにより、新たな財政状況の分析が可能となります。

分析の視点における主な指標は次のとおりです。

### 資産形成度

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるか」の視点において、資産増減の要因や資産形成の傾向、目的別の比重等の把握が可能となります。

資産に関する情報は、これまで決算書における「財産に関する調書」における面積・個数等の情報のみでしたが、固定資産台帳の整備に伴う貸借対照表においては、資産の部において保有する資産のストック情報を一覧表示しており、資産に係る新たな情報を提供するものといえます。

#### 資産老朽化比率

保有している有形固定資産のうち、償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合を算出することにより、耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過したのかを把握することが可能となります。

さらに、資産の償却が進んでいる行政分野や施設について確認することにより、公共施設マネジメントにおける老朽化対策の検討の情報として活用することも可能となります。

○資産老朽化比率＝有形固定資産の各減価償却累計額÷有形固定資産のうち償却資産の取得原価  
(※物品除く)

$$= ( 2,070億7,497万円 \div 2,898億1,800万円 ) \times 100 = \underline{71.5\%}$$

《分析》 本市における公共施設等の資産は取得から一定の期間が経過し、全体的に資産の償却が進んでいることが分かります。

今後は、平成29年3月に策定した「公共施設マネジメント基本方針」の基本理念である「安全で快適な市民生活の確保とまちの持続的発展の実現」のもと、これからのまちづくりを見据えた全体最適化の取組を進めていきます。

### 世代間公平性

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」について、貸借対照表で示される資産、負債及び純資産の対比によって示すものです。財政運営の結果として、資産形成における世代間の負担のバランスが適切か、どのように推移しているかを端的に把握することができます。

#### 純資産比率

純資産の増加は、過去及び現世代の負担により将来世代が利用可能な資源を蓄積したことを表す一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を過去及び現世代が消費していると捉えられます。

このため、純資産に対する資産の比率を算出することにより、保有している有形固定資産等がどの世代の負担により行われたのかを把握し、世代間負担の公平性を測ることが可能となります。

○純資産比率＝「貸借対照表」の純資産÷資産合計

$$= ( 3,563億 947万円 \div 4,175億9,226万円 ) \times 100 = \underline{85.3\%}$$

《分析》 資産の取得については、将来世代の負担と比べて現世代による負担の割合が高くなっています。これは、負担を先送りせず、将来における債務返済費用の抑制に努めることで、必要なサービスに充てる十分な経費の確保に努めることができていることを示しています。

## 持続可能性(健全性)

持続可能性(健全性)は、「財政に持続可能性があるか(借金がどのくらいあるか)」という財政運営に関する本質的な視点に基づいて示される指標です。

財政の健全性に関しては、決算統計時に示される指標「健全化判断比率」による分析が行われますが、財務4表の貸借対照表では、発生主義によって健全化判断比率では捉えることができない退職手当引当金などを含めた全ての負債を捉えることができます。

### 基礎的財政収支(プライマリ・バランス)

資金収支計算書上の業務活動収支及び、投資活動収支の合算額を算出することにより、地方債等の元利償還額を除いた歳出と、地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを示す指標となり、当該バランスが均衡している場合には、持続可能な財政運営が実現できているといえます。

○基礎的財政収支＝「資金収支計算書」の業務活動収支(支出から支払利息を除く)＋投資活動収支

$$= ( 53億3,288万円 + \Delta 25億9,796万円 ) = 27億3,492万円 \rightarrow \underline{27億3,492万円} \text{の黒字}$$

《分析》 令和2年度の茨木市の基礎的財政収支は、収入が支出を上回っている(黒字となった)ため、健全であると言えます。

しかし、収入には国や大阪府からの補助金など外部からの収入(依存財源)が含まれており、その割合が大きいほど外部の影響を受けやすくなるため、自己財源の比率を高めていくことにより、さらなる財政の安定化を図っていく必要があります。

### 債務償還比率

当該年度のストック情報である実質債務(将来負担額－充当可能基金残高)が、当該年度のフローの業務活動収支の黒字分等を償還財源とする場合にその何年分あるか示す指標です。

○債務償還可能年数＝(将来負担額－充当可能基金残高)÷(業務収入等<※>－業務支出)

<※>臨時財政対策債発行可能額含む

$$= ( 685億7,245万円 - 236億1,604万円 ) \div ( 1,188億6,891万円 - 1,124億6,447万円 ) = \underline{7.0} \text{年}$$

《分析》 本市は北摂各市の平均と比較し、償還可能年数が短いことから、市債の残高が少ないといえます。今後も低い数値を維持していくため、財政計画に基づく健全化の取組みを進め、引き続き市債残高の抑制などに取り組んでいく必要があります。

## 効率性

行政コスト計算書で算出される行政コストを人口で除して住民1人当たり行政コストとすることにより、行政活動の効率性を見ることができます。

### 住民1人当たり行政コスト

効率性を測るためには、行政コストに着目することが有効となりますが、人口規模や面積等により、必要となるコストは異なるので、類似団体とそのまま比較することはできませんが、1人当たりの行政コストの額を算出することにより、市民にとってもわかりやすい情報となるとともに、他団体との比較が可能となります。

○住民1人当たり行政コスト＝純経常行政コスト÷住民基本台帳人口(令和3年3月31日現在)

$$= 1,146億7,636万円 \div 283,078人 = \underline{405,105円}$$

《分析》 本市は過去から効率的な行政サービスの実践に努めてきたことから、北摂各市の平均との比較では低額となっています。

## 自律性

「歳入はどのくらい税金等で賄われているか(受益者負担の水準はどうなっているか)」といった観点から、地方公共団体の財政構造の自律性に関するものです。

決算における歳入の内訳や財政力指数が関連しますが、財務書類については、行政コスト計算書において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

### 受益者負担比率

行政コスト計算書における経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額ですので、行政サービス提供に対する負担(経常費用)について、どの程度、使用料や手数料等の受益者負担(経常収益)で賄えているのかを表します。

行政サービス全体の受益者負担の割合を、経年比較したり、類似団体と比較したりすることにより、受益者負担の特徴を把握していくのに活用できます。

#### ○受益者負担比率＝経常収益÷経常費用

$$= 38億3,594万円 \div 1,185億1,230万円 \times 100 = \underline{\underline{3.2\%}}$$

《分析》 行政サービスの提供に対する負担(経常費用)について、本市は北摂各市の中で比較的高いため、受益者負担(経常収益)により賄えているといえます。



## VI 一般会計等 財務書類

---

## 貸借対照表(一般会計等)

(令和3年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
<b>【資産の部】</b>		<b>【負債の部】</b>	
固定資産	407,285	固定負債	54,001 ※
有形固定資産	387,103	地方債	42,516
事業用資産	210,959	長期未払金	606
土地	167,377	退職手当引当金	10,156
立木竹	-	損失補償等引当金	-
建物	142,312	その他	724
建物減価償却累計額	△ 101,241	流動負債	7,281 ※
工作物	25,043	1年内償還予定地方債	4,944
工作物減価償却累計額	△ 24,460	未払金	96
船舶	-	未払費用	-
船舶減価償却累計額	-	前受金	-
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	1,058
航空機	-	預り金	1,177
航空機減価償却累計額	-	その他	7
その他	-		
その他減価償却累計額	-	<b>負債合計</b>	<b>61,283 ※</b>
建設仮勘定	1,928	<b>【純資産の部】</b>	
インフラ資産	174,664	固定資産等形成分	414,095
土地	130,275	余剰分(不足分)	△ 57,786
建物	1,054		
建物減価償却累計額	△ 533		
工作物	121,409		
工作物減価償却累計額	△ 80,841		
その他	-		
その他減価償却累計額	-		
建設仮勘定	3,300		
物品	6,860		
物品減価償却累計額	△ 5,380		
無形固定資産	1,207		
ソフトウェア	1,132		
その他	75		
投資その他の資産	18,975 ※		
投資及び出資金	1,172		
有価証券	-		
出資金	1,172		
その他	-		
投資損失引当金	-		
長期延滞債権	822		
長期貸付金	300		
基金	16,852		
減債基金	-		
その他	16,852		
その他	-		
徴収不能引当金	△ 170		
流動資産	10,307 ※		
現金預金	3,022		
未収金	595		
短期貸付金	0		
基金	6,810		
財政調整基金	6,810		
減債基金	-		
棚卸資産	-		
その他	-		
徴収不能引当金	△ 119		
<b>資産合計</b>	<b>417,592</b>	<b>純資産合計</b>	<b>356,309</b>
		<b>負債及び純資産合計</b>	<b>417,592</b>

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

## 行政コスト計算書(一般会計等)

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	118,512
業務費用	43,693
人件費	17,780 ※
職員給与費	13,076
賞与等引当金繰入額	1,058
退職手当引当金繰入額	1,068
その他	2,577
物件費等	24,753
物件費	17,459
維持補修費	1,690
減価償却費	5,604
その他	-
その他の業務費用	1,160
支払利息	348
徴収不能引当金繰入額	253
その他	559
移転費用	74,819
補助金等	38,540
社会保障給付	28,760
他会計への繰出金	7,469
その他	50
経常収益	3,836
使用料及び手数料	1,505
その他	2,331
純 経 常 行 政 コ ス ト	114,676
臨時損失	49
災害復旧事業費	-
資産除売却損	49
投資損失引当金繰入額	-
損失補償等引当金繰入額	-
その他	0
臨時利益	8
資産売却益	8
その他	0
純 行 政 コ ス ト	114,718 ※

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

## 純資産変動計算書(一般会計等)

自 令和 2年4月 1日  
至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 ( 不 足 分 )
前年度末純資産残高	349,747	409,248	△ 59,501
純行政コスト(△)	△ 114,718	/	△ 114,718
財源	117,229	/	117,229
税込等	57,363	/	57,363
国県等補助金	59,866	/	59,866
本 年 度 差 額	2,511	/	2,511
固定資産等の変動(内部変動)	/	796	△ 796
有形固定資産等の増加	/	6,826	△ 6,826
有形固定資産等の減少	/	△ 6,086	6,086
貸付金・基金等の増加	/	1,479	△ 1,479
貸付金・基金等の減少	/	△ 1,423	1,423
資産評価差額	△ 201	△ 201	/
無償所管換等	4,252	4,252	/
その他	-	-	-
本 年 度 純 資 産 変 動 額	6,562	4,847	1,715
本 年 度 末 純 資 産 残 高	356,309	414,095	△ 57,786

## 資金収支計算書(一般会計等)

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
<b>【業務活動収支】</b>	
業務支出	112,464
業務費用支出	37,645
人件費支出	17,492
物件費等支出	19,305
支払利息支出	343
その他の支出	505
移転費用支出	74,819
補助金等支出	38,540
社会保障給付支出	28,760
他会計への繰出支出	7,469
その他の支出	50
業務収入	117,454
税込等収入	57,262
国県等補助金収入	56,869
使用料及び手数料収入	1,508
その他の収入	1,815
臨時支出	-
災害復旧事業費支出	-
その他の支出	-
臨時収入	-
<b>業 務 活 動 収 支</b>	<b>4,990</b>
<b>【投資活動収支】</b>	
投資活動支出	8,220
公共施設等整備費支出	6,112
基金積立金支出	1,479
投資及び出資金支出	11
貸付金支出	618
その他の支出	-
投資活動収入	5,622
国県等補助金収入	2,997
基金取崩収入	1,423
貸付金元金回収収入	618
資産売却収入	113
その他の収入	471
<b>投 資 活 動 収 支</b>	<b>△ 2,598</b>
<b>【財務活動収支】</b>	
財務活動支出	4,886
地方債償還支出	4,879
その他の支出	7
財務活動収入	2,336
地方債発行収入	2,336
その他の収入	-
<b>財 務 活 動 収 支</b>	<b>△ 2,550</b>
<b>本 年 度 資 金 収 支 額</b>	<b>△ 158</b>
<b>前 年 度 末 資 金 残 高</b>	<b>2,003</b>
<b>本 年 度 末 資 金 残 高</b>	<b>1,845</b>
前年度末歳計外現金残高	1,114
本年度歳計外現金増減額	63
本年度末歳計外現金残高	1,177
本年度末現金預金残高	3,022

## VII 全体会計 財務書類

---



## 全体行政コスト計算書

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	171,019 ※
業務費用	54,204 ※
人件費	18,841 ※
職員給与費	13,890
賞与等引当金繰入額	1,126
退職手当引当金繰入額	1,101
その他	2,723
物件費等	33,482 ※
物件費	21,135
維持補修費	1,917
減価償却費	10,425
その他	4
その他の業務費用	1,882
支払利息	937
徴収不能引当金繰入額	183
その他	762
移転費用	116,814
補助金等	87,982
社会保障給付	28,782
他会計への繰出金	-
その他	50
経常収益	13,169
使用料及び手数料	9,292
その他	3,877
純 経 常 行 政 コ ス ト	157,850
臨時損失	212 ※
災害復旧事業費	-
資産除売却損	106
投資損失引当金繰入額	-
損失補償等引当金繰入額	-
その他	105
臨時利益	187
資産売却益	12
その他	175
純 行 政 コ ス ト	157,875

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。



## 全体純資産変動計算書

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 ( 不 足 分 )
前年度末純資産残高	394,405	541,602	△ 147,197
純行政コスト(△)	△ 157,875	/	△ 157,875
財源	162,496	/	162,496
税金等	76,301	/	76,301
国県等補助金	86,195	/	86,195
本年度差額	4,621	/	4,621
固定資産等の変動(内部変動)	/	△ 39	39
有形固定資産等の増加	/	14,664	△ 14,664
有形固定資産等の減少	/	△ 14,749	14,749
貸付金・基金等の増加	/	1,469	△ 1,469
貸付金・基金等の減少	/	△ 1,423	1,423
資産評価差額	△ 201	△ 201	/
無償所管換等	4,253	4,253	/
その他	-	-	-
本年度純資産変動額	8,673	4,013	4,660
本年度末純資産残高	403,078 ※	545,614 ※	△ 142,537

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

# 全体資金収支計算書

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
<b>【業務活動収支】</b>	
業務支出	164,282
業務費用支出	47,458
人件費支出	18,669
物件費等支出	23,295
支払利息支出	929
その他の支出	4,565
移転費用支出	116,824 ※
補助金等支出	87,991
社会保障給付支出	28,782
他会計への繰出支出	-
その他の支出	50
業務収入	173,893
税収等収入	74,497
国県等補助金収入	82,461
使用料及び手数料収入	9,254
その他の収入	7,681
臨時支出	102
災害復旧事業費支出	-
その他の支出	102
臨時収入	27
<b>業務活動収支</b>	<b>9,535 ※</b>
<b>【投資活動収支】</b>	
投資活動支出	13,003
公共施設等整備費支出	10,656
基金積立金支出	1,729
投資及び出資金支出	-
貸付金支出	618
その他の支出	-
投資活動収入	6,566
国県等補助金収入	3,514
基金取崩収入	1,423
貸付金元金回収収入	618
資産売却収入	122
その他の収入	889
<b>投資活動収支</b>	<b>△ 6,438 ※</b>
<b>【財務活動収支】</b>	
財務活動支出	8,124 ※
地方債償還支出	8,116
その他の支出	7
財務活動収入	3,655
地方債発行収入	3,655
その他の収入	-
<b>財務活動収支</b>	<b>△ 4,469</b>
<b>本年度資金収支額</b>	<b>△ 1,371 ※</b>
前年度末資金残高	9,754
<b>本年度末資金残高</b>	<b>8,383</b>
前年度末歳計外現金残高	1,117
本年度歳計外現金増減額	60
本年度末歳計外現金残高	1,177
<b>本年度末現金預金残高</b>	<b>9,560</b>

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

## VIII 連結会計 財務書類

---

## 連結貸借対照表

(令和3年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
<b>【資産の部】</b>		<b>【負債の部】</b>	
固定資産	560,558 ※	固定負債	152,059
有形固定資産	525,300	地方債	73,547
事業用資産	211,020 ※	長期未払金	606
土地	167,437	退職手当引当金	10,777
立木竹	-	損失補償等引当金	-
建物	142,318	その他	67,129
建物減価償却累計額	△ 101,245	流動負債	16,535 ※
工作物	25,043	1年内償還予定地方債	9,210
工作物減価償却累計額	△ 24,460	未払金	4,499
船舶	-	未払費用	7
船舶減価償却累計額	-	前受金	7
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	1,180
航空機	-	預り金	1,562
航空機減価償却累計額	-	その他	71
その他	2		
その他減価償却累計額	△ 2	<b>負債合計</b>	<b>168,593 ※</b>
建設仮勘定	1,928	<b>【純資産の部】</b>	
インフラ資産	304,834	固定資産等形成分	567,368
土地	137,491	余剰分(不足分)	△ 149,994
建物	13,519	他団体出資等分	633
建物減価償却累計額	△ 8,211		
工作物	346,082		
工作物減価償却累計額	△ 189,009		
その他	331		
その他減価償却累計額	△ 139		
建設仮勘定	4,770		
物品	35,538		
物品減価償却累計額	△ 26,092		
無形固定資産	14,210		
ソフトウェア	1,322		
その他	12,888		
投資その他の資産	21,047		
投資及び出資金	576		
有価証券	107		
出資金	469		
その他	-		
長期延滞債権	1,965		
長期貸付金	301		
基金	18,631		
減債基金	-		
その他	18,631		
その他	95		
徴収不能引当金	△ 521		
流動資産	26,043 ※		
現金預金	15,368		
未収金	2,862		
短期貸付金	-		
基金	6,810		
財政調整基金	6,810		
減債基金	-		
棚卸資産	786		
その他	482		
徴収不能引当金	△ 266		
繰延資産	-		
<b>資産合計</b>	<b>586,601</b>	<b>純資産合計</b>	<b>418,007</b>
		<b>負債及び純資産合計</b>	<b>586,601 ※</b>

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

## 連結行政コスト計算書

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	金 額
経常費用	207,665
業務費用	62,213
人件費	19,314 ※
職員給与費	14,222
賞与等引当金繰入額	1,152
退職手当引当金繰入額	1,123
その他	2,818
物件費等	36,818
物件費	22,830
維持補修費	2,142
減価償却費	11,393
その他	453
その他の業務費用	6,081
支払利息	1,050
徴収不能引当金繰入額	184
その他	4,847
移転費用	145,452 ※
補助金等	116,594
社会保障給付	28,782
他会計への繰出金	-
その他	75
経常収益	21,740
使用料及び手数料	11,549
その他	10,191
<b>純 経 常 行 政 コ ス ト</b>	<b>185,925</b>
臨時損失	269
災害復旧事業費	-
資産除売却損	106
損失補償等引当金繰入額	-
その他	163
臨時利益	252 ※
資産売却益	14
その他	237
<b>純 行 政 コ ス ト</b>	<b>185,943 ※</b>

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

## 連結純資産変動計算書

自 令和 2年4月 1日

至 令和 3年3月31日

(単位:百万円)

科 目	合 計	固 定 資 産 等 形 成 分	余 剰 分 ( 不 足 分 )	他 団 体 等 出 資 分
前年度末純資産残高	408,107	562,438	△ 154,555	224
純行政コスト(△)	△ 185,943 ※		△ 185,923	△ 21
財源	191,614		191,581	33
税金等	90,887		90,887	-
国県等補助金	100,727		100,694	33
本年度差額	5,671		5,659 ※	12
固定資産等の変動(内部変動)		926 ※	△ 926 ※	
有形固定資産等の増加		15,748	△ 15,748	
有形固定資産等の減少		△ 14,757	14,757	
貸付金・基金等の増加		1,624	△ 1,624	
貸付金・基金等の減少		△ 1,688	1,688	
資産評価差額	△ 216	△ 216		
無償所管換等	4,255	4,255		
他団体出資等分の増加	-			-
他団体出資等分の減少	-			-
比例連結割合変更に伴う差額	397			397
その他	△ 206	△ 35	△ 171	
本年度純資産変動額	9,900 ※	4,930	4,561 ※	409
本年度末純資産残高	418,007	567,368	△ 149,994	633

※ 下位項目との金額差は、単位未満の四捨五入によるものです。

※連結会計における財務書類については、総務省作成マニュアル「連結財務書類の手引き」に基づき、資金収支計算書をのぞく貸借対照表・行政コスト計算書・純資産変動計算書を作成しています。 ▽

いばらきの今と未来をまもるため



いばら騎士社!